

## 本号のテーマ：「My Little 温故知新」

久し振りに上がった実家の二階。乱雑に積み重ねたかび臭い有象無象(=ごったく)。埃を被ったまま40年近くが経っていた。

御茶ノ水駅の聖橋口を出ると目の前に丸善書店がありその隣に「ウィーン」という名の名曲喫茶があった。外見は西洋の城をモチーフにしたいかにもな商業施設ですでに相当の経年を感じさせた。中に入ると薄暗くどこか戦前を感じさせる洋風吹き抜け構造になっていてぐるりと壁を囲むようにテーブル席をしつらえた踊り場がいくつもある。そのそれぞれが小階段で繋がっていて4階くらいまであったのだろうか。江戸川乱歩に描かれる「洋館」のイメージだった。「ウィーン」の良いところはひとたび飲み物を注文すればうるさいことは一切言われず何時間でも長居をしていてよいところだった。大学が午前で終わった時などは四ツ谷からわざわざ総武線に乗り「ウィーン」にやって来てはバッハやドビュッシーの音色に包まれて大衆小説から多少硬派なものまで読書に耽っていたものだった。図書館で読めばよいのにと自分でも思うのだが行きつけの定食屋や映画館というものが決まっているように読むときも定位置というのはやはりあるのだ。



読むものがないときには「ウィーン」には寄らず御茶ノ水橋口の交差点を神田川とは逆の方角にブラブラと下って行った。途中の楽器屋や明治大学の名物(?)立て看板があったりするのを見ながら下りてゆくと、これまた安く美味しいのでよく通った明治大学の師弟食堂があった。「山の上ホテル入口」の看板を横目で見ながらさらに進むとほどなく駿河台下の交差点に至る。そこは三省堂書店本店が目印の神田神保町界隈への入り口だった。しかし、ほとんどの場合立ち寄るのは三省堂でも書泉グランデでもなかった。お目当ては神保町に軒を連ねるたくさんの古本屋だった。



ちょうどその頃は江戸時代の地方統治についての授業を受けていたのでずいぶんと興味がそそられていたのだと思う。「50 円」、「100 円」などと背表紙に店主が鉛筆書きした黄ばんだ小説数冊とともに普段ならば絶対に食指を動かさないような郷土史の本も衝動買いした記憶が蘇った。それは「相州三浦郡秋谷村文書（横須賀史学研究会編）」という本で当時期末レポートの資料としようと思って中をよく見ずに求めたのだろう。



ほぼ全てが江戸時代特有の公文書調の漢文で書かれているためにすぐに放擲してしまったのだ。その本をつい先ごろ実家で「発掘」して令和の今になってあらためて検分している次第なのである。よくよく見るとはしがきには研究会による説明（これは現代語）が加えられている。なんでもこの資料は三浦半島秋谷村の由緒正しき名主の家に代々伝わる膨大な村政文書を分野ごとにまとめたものであるそうだ。

ところで江戸時代の農民らについてどのようなイメージを持っているだろうかと思問してみる。教科書的な理解はこうだ。農民らは絶対的支配者階級である武士勢力に完全に統制・抑圧され税率50%に達する本途物成（年貢）や副業にかかる小物成や土木工事や宿駅整備のための各種人足役務などを課され、移動や職業選択の自由はなく、脆弱なインフラ環境の下で天変地異の被害を真っ先に受けていた。いわゆる「やられっぱなし」の状態が存在してはたしてこの世に生きる幸せを見出していたのだろうかと考えてしまう。かくの如く先入観を意識しながらこの文書の斜め読みにチャレンジしてみると…

「安政元年（1855年）御触書之写」という項に地元の陣屋（秋谷村は幕府直轄領であった）から名主に宛てた警告文が乗っている。「毎年正月、祝詞を唱えて村々で子供らが集まって道に縄を張って通行人を通せんぼしては銭を取っている。中には大人が混ざっている。またその縄に泥を塗りたくって女子供に巻き付け、石を投げ悪口を言い放つ不埒な者がいる。荷役運搬中の牛馬のまわりで騒ぎ立て棒で驚かしてもいる。子供らのいたずらといえども不届きで親の教育も緩い」ゆえに「向後屹度可被及御吟味条、此段相心得可罷在事（今後はすぐにお取り調べを受けることになるので、このことは心得ておくべきこととございます）」まずは驚きである。庶民もなかなか反発しているではないか。また役所も問答無用の捕縛などはせずにはまずは警告してくるところが懐が深くで心憎い。

さらに享保十四年（1729年）に「御促飼場入替赦免願（おんとりかいばいれかえしゃめんねがい）」という項がある。「三浦郡の2万2千石の内6千石を御鷹狩場としてお使いなさるとのご命令で代官様がいらっしゃり図面やらご案内を差し上げましたところが、私共の土地は場所が悪く山沢にある田畑であるので只今鳥がおりません」「4名の鷹匠様もお越しになられましたが鳥が一切おりません」「鷹狩のために鳥を驚かさないよう鉄砲を撃たずに



いると猪鹿がおびただしく増えて田畑を荒らし農民が難儀しております」「ご慈悲を以て鷹狩場は他所に入れ替えていただけるとこの上なく有り難く存じます」そして極めつけは上申書の前口上にある。

「只今迄御鳥附不申候（只今まで獲物となる鳥は居付きません）」「然共此已後鳥附可申哉、其儀難斗奉存候（今後も鳥が

居附くかどうかの件は推測しがたいこととございます）」とすべてを鳥に責任転嫁している。

このとぼけた感じが可笑しいやら感心するやら。この名主は相当に高い知能の持ち主であったはずだ。

ここまで読んでみると江戸の庶民らは一方的に搾取されていたのではなく実に伶俐に洒落を利かせて支配者階級にしっぺ返しをしながら体制の中を生きていたのだとわかってくる。実に痛快な気持ちになる。ああ、コロナ禍が一段落したら久しぶりに蔵前の東京江戸博物館にでも行こう。そしてお茶の水駅から神保町へのあの緩い坂道を歩いてみよう。古本屋街も行ってみるか…。埃の中でこの本を手にとったことで大好きだった街を思い出し、歴史のくもりの一端が晴れた。つくづく本は買うものだと思う。

